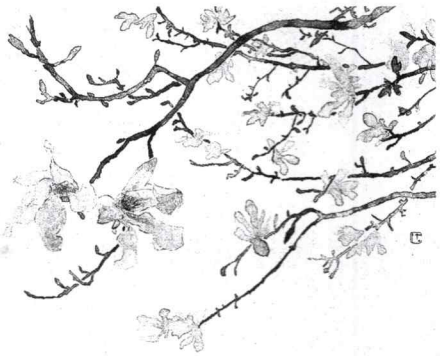
朝日 歌壇 俳壇



〈ひらいててもコブシ〉　北村さゆり

俳句時評　石田波郷新人賞を読む

岸本　尚毅

石田波郷新人賞の授賞式が先月、江東区砂町文化センター石田波郷記念館で行われた。三十歳以下を対象とする二十句の競作。選者三人も五十歳以下で、俳句の賞としては比較的若い。

応募は百二十九篇。正賞は二十歳（受賞当時、以下同じ）の辻村栗栖。受賞作の一つ〈茶の花や寮生が掃く寮のまへ〉は学生寮のたたずまい。〈寄居虫や灯台の絵を売り暮らす〉は海辺の町に住む人物。自分で描いた絵を街頭で売るのか。〈小名木川夜景のなかを細く冴え〉は下町の古い運河の景。「夜景のなかを細く冴え」は、景の細部を略しつつ東京の近代を叙情的に捉えた。もしかすると、久保田万太郎の〈神田川祭の中をながれけり〉にヒントを得たのかもしれない。

準賞の篠原圭太は二十二歳。〈かなかなや錠剤尽きて瓶に粉〉は些事を詠みつつヒグラシの声に感興を見出した。準賞の堀内晴斗は二十歳。〈木の棒が氷菓の中に透けてゐる〉は素朴な眼ざし。賞創設の功労者の名を冠した大山雅由記念奨励賞の伊藤菖蒲は二十三歳。〈秋めくや墨絵に白き昼のある〉の巧さに驚く。

選者の西村麒麟は、波郷に作品が似ていなくても、波郷のような熱い心や高い志を持った作者は大歓迎だという。

この新人賞は東京都清瀬市の事業として発足。諸事情により二〇二三年に終結したが、この第十六回から江東区主催で再開。波郷が結核の療養をした東京病院のある清瀬市から、波郷が十余年暮らした北砂町のあった江東区へ。波郷にゆかりの両自治体の間で波郷新人賞が継承されたことを喜びたい。

（俳人）

◆5月3日付の朝日歌壇俳壇面は休載します。

風信

第70回現代歌人協会賞　小原奈実さんの「声影記」（港の人）と貝澤駿一さんの「ダニー・ボーイ」（本阿弥書店）に決まった。

第24回前川佐美雄賞　ながらみ書房主催。日高堯子さんの歌集「日在浜」（角川書店）に。第34回ながらみ書房出版賞は屋良健一郎さんの歌集「KOZA」（ながらみ書房）に決まった。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます（選に2作品まで）。QRコードから。

高山れおな選

戦争を始めた男囀れる　（京都市）加藤しげお

存在やエイプリルフールの闇に湧く　（さぬき市）鈴木　幸江

一列に並ぶ釣人蜃気楼　（東京都板橋区）竹内宗一郎

竜天に登るや宮津濟荒るる　（横浜市）木村　実

賢者めざめよ虫出しの雷ひとつ　（松山市）杉山　望

桜みる母がいちばん好きな母　（上尾市）宮本　幸子

野火走る棚田の形そのままに　（大和郡山市）宮本　正勝

路面電車曲がれば傾ぐ花見客　（稲城市）坂田　篤義

平台の新入生の読むべき本　（川崎市）多田　敬

ねえちゃんとグリコしながら見たつくし　（越谷市）宮津　亜紀

【評】加藤さん。客観的に叙して姿はなだらか。「囀れる」がいかにも辛辣だ。鈴木さん。句が由来する事象は一席と同じだろう。ただし、さらにもう一段の屈折を感じるが。竹内さん。釣人の列そのものが蜃気楼のような頼りなさではないか。

小林貴子選

さくらさくらひらがなでかくひらひらと　（札幌市）三船　悦子

耐へらるるほどの孤独と花吹雪　（東京都杉並区）漆川　夕

菜園も竹の子藪も家の前　（袖ケ浦市）浜野まさる

はんだづけされたるやうながうなかな　（東京都板橋区）竹内宗一郎

二歳児に姉御肌あり春の園　（静岡市）名田　幸一

かふんしょうくしゅんくしゅんとさかあがり　（越谷市）宮津　亜紀

縄文と変らぬわれや磯遊　（大津市）中村　良一

亀五匹重なりどれか鳴くを待つ　（西条市）稲井　夏炉

姉逝きぬ甥等姪等と花の刻　（伊那市）北原喜美恵

夕霞妻ある如く花を買う　（北九州市）野崎　仁

【評】一句目、ひらがなの形は優しい。「さくら」と書けば象形文字のよう。二句目、耐えられない孤独には見舞われないように生きていきたい。三句目、豊かな土地がらがうらやましい。四句目、「がうな」（ごうな）は寄居虫、春の季語。

長谷川櫂選

戦争で始まるニュース春の朝　（横浜市）白川　修

花の下深き眠りの石舞台　（伊丹市）保理江順子

戦地から来たやうに飛ぶ濡れつばめ　（浜松市）尾内甲太郎

はるか沖まで点描の潮干狩　（横須賀市）榎本　二郎

花見酒大統領をこき下ろす　（日進市）松山　眞

幼木の精一杯の桜かな　（松山市）正岡　唯真

三度目の吉野は閑か花の雨　（岡山市）三好　泥子

いかなごを鍋一杯に焚きし日も　（大阪市）山内　繭彦

桜貝波のかたちに並びけり　（金沢市）飯野日々子

スーツケースガラゴロガララ春休み　（芦屋市）劉　葉子

【評】一席。自分ではじめて自分では終わらせられない。「トランプの戦争」。二席。積み重なる巨大な石の眠りである。ひんやりと。三席。昔の士官を思わせる姿。十九世紀の戦争か。十句目。「ガララ」がうまい。あの騒々しさを歌にした。

大串　章選

百歳のピアノの音色春うらら　（島原市）岡崎　潤子

六回目の転校先で卒業す　（大村市）小谷　一夫

一人死にひとり産まれて島の春　（宍粟市）岩神　刻舟

老二人絵本みてゐる春夜かな　（大阪市）島田　和子

四阿の椅子は切株つぼめ来る　（東京都杉並区）齊藤　保志

能面の表情豊か花篝　（国分寺市）後藤真里子

少子化の村に満開梨の花　（いわき市）佐藤　朱夏

村の名のまたひとつ消ゆ山ざくら　（長野市）縣　展子

街騒に遠く落花を徘徊す　（柏市）藤嶋　務

春愁や空き家の増ゆる村にゐて　（加古川市）森木　史子

【評】第1句。百歳のお年寄りがピアノを弾いておられる。ピアニスト室井摩耶子先生が思い浮かぶ。第2句。六回も転校を重ねてやっと卒業。転勤族のお子さんか。第3句。こうして「島」は子孫に引き継がれてゆく。「島の春」が明るく健やか。